

京極読書新聞 <第9号>

発行日 平成21年12月1日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

花を飾ること

湧学館 佐々木 和恵 (ささき・かずえ)

11月18日から不定期に3回の日程でフラワーアレンジメント講座を開催しており、2回の講習を終えました。基礎の内容なので、お花の切り方、挿し方、水の管理などからはじめ、その後基本形のアレンジの作成に入っています。

今回参加頂いている方々は全員、アレンジメントは初めて！という方ばかり。はじめはそれぞれ不安そうでしたが、ある程度花が入って形が整ってくると、周りの人の作品と見比べたり、お花の挿し位置を相談しながら手際よく進み、最後はニコニコ顔で「自分が作ったとは思えない！」、「楽しかった、ハマリそう！」と喜んでくださる方もいるくらい、きれいな作品が仕上がりました。さすが、お花好きのみなさんです。

私の初めてのアレンジメントは、悲惨な出来でした。基礎を教わらず、いきなりフリースタイルだったこともありましたが、やはり一番の理由は「興味がなかった」ことだと思います。花は好きでしたが、アレンジメントには特に興味がありませんでした。結局アレンジメントを始めたのは、その何年かあと、花に関わる資格をとりたと思ったことからです。練習には生花を使うので、家の中にはいつも花と、花の香りがあり、毎日花と接しているうちに、花にも正面や背面、きれいに見える向きがあること、自然なしなりや曲

がりをアレンジのラインに生かしていくことが分かって、どんどん楽しくなりました。物事の上達には、そのことが好きで、興味をもてるということがとても大切な要素だということも身をもって感じました。



▲ アレンジ基礎型② 完成品

「豊かさ」には色々な種類がありますが、花を飾ることは私にとって一つの「豊かさ」です。とっても豪華なものでなく少しの花でも家の中は華やぎますし、その花を見るたびに嬉しい気持ちになります。場を華やかに、あるいは和やかにする花の力は抜群です。

講習会に参加して下さったみなさんが、益々花を好きになってくれて、新たな花の楽しみ方を知ってくれば幸いです。次回最終回は、フリースタイルのクリスマスアレンジです。みんなでわいわい製作していくのが今から楽しみです。

11/27(金) フラワーアレンジ 基礎型②の様子



京極読書新聞第10号は
2月1日(月)発行です。



中学生にこの一冊！

◆ (社)日本新聞協会編「心がぼかぼかするニュース2008」

受験を控えた3年生は、面接に備えて新聞でも読み始めているところでしょうか？ この本は日々の新聞から『身近なしあわせ』を感じられる記事を集めた一冊です。

私のお気に入りには「サンタ追跡 米軍大作戦」というクリスマス日の記事。夢を運ぶ“サンタ”と物々しい印象の“米軍”という何とも不思議な組み合わせですが、なんと北米航空宇宙防衛司令部にはサンタ追跡本部があるんだとか！ クリスマスには軍の機密技術でサンタを探知し、WEB上で現在位置を教えてくれるほか、子ども達からの問い合わせにも親切に対応してくれるそう。始まったきっかけは新聞広告の誤植とのことですが、それを50年以上も続けてしまう真面目で優しい軍人さんたちに思わずほっこりとした気分になりました。クリスマスにはWEB上で一緒にサンタ追跡をしたいものです。

さて、これからしばらく寒い季節が続きます。身も心もぼかぼかと暖かくして過ごしましょう！

湧学館司書 向出 絵梨香(むこうで・えりか)

◆ チャールズ・ディケンズ「クリスマス・キャロル」

クリスマスイブの一夜に起こる物語、イギリスの文豪ディケンズの小説です。何度も映画化され、舞台の演目にもとりあげられている有名な小説。私の田舎ではローカルテレビ局で、毎年クリスマスの2、3日前に、1970年製作のミュージカル仕立ての映画「クリスマス・キャロル」が放送されていて、毎年楽しみにしていました。

金貸し業を営むドケチで強欲なスクルージは、町の嫌われ者。そんなスクルージのところにクリスマスイブの夜、3人のクリスマスの精霊が現れます。精霊の導きで時を越え、過去・現在・未来の自分の姿を見せられるスクルージ。一夜明けてクリスマスの朝、スクルージは、どんな生き方を選択するのか？

精霊の出現、時空を越えるタイムトラベルなど、超自然の要素が面白いし、自分の今の生き方が、未来の自分につながっていく、という当たり前のことを教えてくれるお話。

ディケンズは「大いなる遺産」、「二都物語」などもおもしろいですが、冬のお勧めは、断然「クリスマス・キャロル」。雪がちらつき始めると読み返したくなる一冊です。

湧学館 佐々木 和恵(ささき・かずえ)

啄木文学散歩 ③(小樽～釧路)

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな (小樽駅前歌碑)

釧路新聞社の職も決まり、小樽に家族を残し、単身、釧路へ向かおうとする石川啄木。明治41年1月19日朝の中央小樽駅の光景です。妻・節子の眉にはどんな思いが去来していたのでしょう。一方の啄木は、釧路に着くまでに、岩見沢、旭川と二泊し、ようやく三日目の真夜中に釧路駅に到着するという長旅でした。

空知川雪に埋れて
鳥も見えず
岸辺の林に人ひとりゐき (滝川・空知川河畔碑)

湧学館司書 新谷保人 (あらや・やすひと)

函館～札幌～小樽とまわってきた啄木にとって釧路の街というのは、起承転結の比喻で言えば「結」にあたります。北海道漂泊のラストにふさわしく、情感の激しい美しい歌が多いのですが、その釧路に入る直前の二泊三日を詠った一群の歌もなかなかしんみりとした良い歌にあふれています。玄人受けする歌といいたいでしょうか。小樽時代の殺伐とした人間関係の歌が一転して、このような、汽車の窓から北海道の雪の原野と静かに対話する啄木という情景へ変わるのには意表をつけています。だからこそ、この汽車がふたたび人間関係の渦巻く巷・釧路の街へと入ってゆく展開が活きてくるのです。

さいはての駅に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき (釧路・港文館歌碑)

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください

